

15世紀以降「塵世」、または「俗世」という意味で使われ、16世紀以降は、妓楼や歌舞伎など享楽にふける場所を指すことにもなった。浮世絵の題材として最もよく使われているのは仕女画であり、「美人画」と称される。なかでも妓楼で働く女たちの姿を描いたものは、江戸時代の派手な社会の気風の描写であるといえる。

浮世絵は庶民の生活を描写する風俗画でもあり、江戸時代には早くも当時の世俗画業界の中心になっていた。18世紀後期、浮世絵画家の作品が大量に広まって、美人画は隆盛期をむかえた。浮世絵の構図、独特な人物造形、鮮やかな色彩で形成された強烈な対比、及び主題内容などに日本画の特色が溢れており、中国画及び西洋画と顕著な違いをもっている。

初期の美人画は日本の貴族文化の一部ともいえよう。その題材は、仏教に関するもの以外は主に上層社会の貴婦人たちの生活を描いた。その後、武士階級の地位の上昇につれ、女性の家庭内の地位も貴族時代より高くなり、美人画の内容もだんだん武士階級の文化の一部に拡大した。江戸時代以降、美人画が繁栄期に入り、その題材も大きく変わった。美人のモデルが多く歌舞伎役者などになり、美人画はますます世俗的な様相を呈するようになっていった。そして19世紀半ばに浮世絵美人画の発展は終焉を迎えた。

浮世絵美人画が世俗的で淫靡な表現にまで向かったのは、日本の伝統的な幽玄で婉曲な審美主義とはまったく

相容れないように思われる。しかし、よく考えてみるとこのことはそう理解しがたいものではない。

まず、日本人が古くから性に対して、開放的な態度をもって来たこと。この点は日本人のうわべの印象とは一致しないように思われる恐れがあるが、今日に至るまで依然として繁栄する日本のポルノ文化からみても、日本の性に対する態度は比較的開放的であることがわかる。日本文化の性格は「菊」と「刀」の複雑な合体である。

次は、浮世絵美人画が盛んになった時代背景との関係である。江戸時代は、貴族、武士の地位が低くなり、新興の商人階層が急速に増大した。商人文化は貴族文化や武士文化とは完全に異なるものであり、より享乐的な傾向が強い。この現世の楽しみに対する愛着と追求が、美しく露骨な美人を描く浮世絵芸術に反映された。しかし、このような転換が浮世絵芸術を墮落させたのか、それともそれを新しい境界まで推し進めたのか、意見はまちまちである。

私が思うに、われわれはポルノ芸術に適切な地位を与えるべきである。今日の芸術道徳観では、いかなる芸術形式をもみだりに否定してはならない。まして浮世絵芸術はかつて一時代を築き、日本、ひいては西洋の絵画芸術に巨大な影響を及ぼしたのだから。

(衣曉龍さんは2007年7月26日～8月8日まで、訪問研究員として来日された。)

*本稿は中国語で提出されたものを劉湯水(RA)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で一部手を加えたものである。

Voices of Young Scholars 8

香港における日本のテレビドラマ

王 志垣 (香港大学日本ドラマ専攻修士生 / RA研究員) WONG Chi Hang

1970年に放映された「サインはV」(TBS、1969年)から、日本の連続ドラマは香港人の心の中で重要な位置を占め、香港人全体の記憶の中の欠かせない一部分になった。「魔の变化球サーブ」でバレーボールが好きになったり、おしんの不運に毎晩涙をこぼしたり、ガラスのりんごを愛の証としたりする者が続出するほどであった。しかし、このように30年来、香港人が幾度も感動

してきた日本ドラマは、21世紀になってからやや勢いが衰えてきたようだ。「HERO」(フジテレビ、2001年)と「白い巨塔」(同、2003年)を除き、深い印象を残したドラマはほとんどなく、全盛期とは雲泥の差がある。2005年に放映された韓国の「大長今(邦題:宮廷女官チャングムの誓い)」が多大人気を集め、以降、各局は競って韓国ドラマを放映し、香港で「韓流ブーム」を呼び起こ

し、日本に対する注目度はさらに下がる結果となった。日本ドラマはこれまでの勢いを取り戻せないまま、韓国ドラマに取って代わられることになるのだろうか。

香港人が初めて日本の連続ドラマを見たのは、「麗的映声」(Rediffusion Television, RTV) がシェアを独占していた1960年代に遡ることができる。1967年3月、日本の連続テレビ時代劇「武士道」(1962年)がRTVで放映され、これは香港人にとって初めての日本ドラマであった。しかし実際はそれ以前に、RTVの英語チャンネルでは既に同ドラマの英語版が放映されていた。なぜ英語版なのかというと、このドラマの放映権を取得したオーストラリアのテレビ局が英語吹替版を制作して放映し、大いに人気を博したことがあり、それを知ったRTVはオーストラリアのテレビ局からこの英語版を購入し、放映したのである。1967年になると、広東語の吹替え版がお目見えしたことで、初めて一般の香港人が日本ドラマを体験することができたといえよう。

1967年11月、「無線電視」(Television Broadcast Company, TVB) が開設され、RTVの独占を打破し、香港テレビ界に活力と発展をもたらした。TVBは地域、ジャンル、視聴ターゲットが異なる数多くの番組を導入し、視聴者に豊かな選択肢を提供しただけではなく、1970年代香港における「日本ドラマブーム」の生みの親でもあった。「サインはV」、「柔道一直線」(TBS、1969年)「おくさまは18歳」(同、1970年)「おれは男だ」(日本テレビ、1971年)「木枯らし紋次郎」(フジテレビ、1972年)「俺たちの旅」(日本テレビ、1975年)と「Gメン'75」(TBS、1975年)などの連ドラがTVBで放映され、熱烈な歓迎を受け、香港における日本ドラマの地歩を固めた。このときの「日本ドラマブーム」は長く続かなかったが、これらのドラマによって日本文化は次第に香港人の生活に浸透し始めた。1970年代以降、テレビ各局は自作番組の製作に力を入れ、香港ドラマは質的にも量的にも大幅に向上し、黄金時代を迎えた。それに伴い、日本ドラマの重要性が徐々に弱くなり、番組表から姿を消していった。1980年代には、他局ゴールデンタイムドラマの対抗馬としてTVBで放映された「おしん」(NHK、1983年)のように人気を得たドラマもあるが、それもほとんど単発的なものでしかなく、全体として日本ドラマは影をひそめた時期だったといえる。

1990年代になると、日本ドラマは時代の息吹を感じさせる新しいスタイルで登場し、再び各局の注目を浴びる



ようになった。1990年代初め、やや立場の弱い「亜洲電視」(Asia Television) は、自作ドラマの視聴率とTVBとの差が拡大していく中で、日本ドラマに目を転じ、共存続の希望を託した。「東京ラブストーリー」(フジテレビ、1991年)や「家なき子」(日本テレビ、1994年)などが大ヒットし、人々が日本ドラマに対して新たな関心を持つようになった。遅れをとるまいと、TVBも「ひとつ屋根の下」(フジテレビ、1993年)「金田一少年の事件簿」(日本テレビ、1995年)などの人気ドラマを放映し、1990年代半ばの海賊版日本ドラマを見る風潮に間接的に影響を及ぼした。開局したばかりの「有線電視」(Cable TV) もこの流れにのって、所有する女性チャンネル、若者チャンネルで大量の日本ドラマを放映し、視聴者の獲得に躍起になった。

21世紀に入ってから、日本ドラマは再び勢いを失った。中国大陆と台湾が香港の主要なドラマ輸入地となった上に近年韓国ドラマが健闘しており、日本ドラマのシェア減少は免れないだろう。しかし、テレビ局にとって、日本ドラマが信頼できる「視聴率安定剤」であることは変わっていない。起伏の激しい台湾や韓国ドラマと比べて、日本ドラマの視聴率は長期にわたって安定する傾向があり、これは間違いなくテレビ局側及びスポンサーの望むところでもある。

総じて言えば、香港において日本ドラマは番組表の中心となることのない「永遠の二番手」ではあったが、その安定した質により、テレビ各局が信頼を寄せる予備軍として、香港のテレビ放送業界40年余りの歴史の中で変わらず存在してきたといえよう。

(王志垣さんは2006年10月7日～10月20日まで訪問研究員として来日された。)

* 本稿は中国語で提出されたものを王京(PD)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で一部手を加えたものである。